

〈 2. 特集 行く・読む 〉

「舞子」を育てる
 ——「やまがた舞子伝承の夕べ」を事例に——

谷岡 優子

1975年頃より、全国的に花柳界は若手芸妓が減少し、次世代の芸の担い手に悩まされてきた。このため、各地の花柳界では、新たな芸の担い手を確保するべく、さまざまな工夫を重ねてきた。

1996年、山形県山形市の花柳界では、花柳界の再活性化と若手の芸の担い手の確保を図るため、新潟市の「柳都振興」に倣い、「山形伝統芸能振興株式会社」、通称「やまがた紅の会（以降、「紅の会」と表記）」を立ち上げた。

「紅の会」は、これまでの山形市の花柳界の仕組みとは異なり、芸妓置屋や料亭が「半玉」を育成するのではなく、市内の有志企業の支援を受け、社員芸妓「やまがた舞子」を育成するという仕組みを採用している¹。

その後、山形の花柳界では、多くの「やまがた舞子」が輩出され、また、2013年には「地方」研修生である「やまがた芸子」が新たに誕生した。山形市の花柳界では、今後一層の盛り上がりが見込まれている（写真1）。



写真1 「やまがた舞子」7～10期生（「小はな」、「菜乃葉」、「沙弥」、「櫻子」、「志乃」、「いち葉」、「ことり」、「あやめ」）

これらの舞子・芸子を育成する「紅の会」は、社員芸妓の養成、芸妓の派遣の仲介を担う会社であるが、山形市内にはこのほかにも、山形市で活躍する

芸妓を支援する団体がある。それが「やまがた舞子を育てる会（以降、『育てる会』と表記）」そして「山形芸妓育成支援協議会」である。「育てる会」は、1997年に舞子の育成と資質の向上を支援するため、山形商工会議所が立ち上げた組織である。会員規模は、110名（2013年4月1日現在）、会員は、山形商工会議所会員・議員のほか、ホテル、飲食店、一般企業、弁護士、医師、そして一般個人会員等で構成されている。

一方、「山形芸妓育成協議会」は、2013年に発足した支援組織で、支援の対象を舞子、芸子、そして長年の山形市の花柳界を支えた「山形芸妓」にまで広げた団体である。

¹ 会社が発足する以前の山形市内の花柳界では、一本の芸妓になる前の存在を「半玉」と呼んでいた。「紅の会」が用いる「やまがた舞子」の名称は、会社の立ち上げに伴い、新たに創設したものであるが、この舞子はかつての「半玉」に相当する存在である。

この2つの団体は、山形の舞子・芸子・芸妓の芸の発表会である「やまがた舞子伝承の夕べ」を年2回（夏・冬）催している。このうち、冬は山形市内の6つの料亭²のいずれかで、夏は山形市内のホテル等4会場³で持ち回りにて開催されている。冬の会は、会員総会を併せて行なうため、参加は会員のみに限られるが、夏の会は、より多くの人びとに山形で継承される伝統芸能を知ってもらうため、会員以外からの参加を認めている。

本稿は、2014年8月29日に開催された第35回「やまがた舞子伝承の夕べ」を通して、支援団体による「やまがた舞子」の育成の実態をみていく。

まず、発表会の流れについて説明する。開会の挨拶のあと、舞子、芸子、芸妓による発表が行なわれる。今回は、大和楽より「序の舞」、「田植」、「江戸祭」のほか、舞子たちの師匠である清元美多朗と芸妓の「小蝶」の作品「山形風流」の計4演目が披露された（写真2、写真3）。



写真2 大和楽「江戸祭」立方
*「やまがた舞子」の「紗弥」による。



写真3 大和楽「江戸祭」地方
*鳴物は山形芸妓の「二郎」、三味線は「山形芸妓」の「金太」、「菊弥」と「やまがた芸子」の「美ゆき」による。

なお、演目は毎回変更されており、清元美多朗師匠が毎年工夫を凝らした作品を提供している。また、舞子たちの衣装も、「紅の会」の支配人がこの日のために新調したものである。

そして、これらの演舞が終了すると、「育てる会」より「紅の会」に対し、舞子らへの研修費が贈呈される。元々、この発表会の主催者である「育てる会」は、「紅の会」を経済的に支援するべく発足した団体であるため、発表会ではこのような贈答式が行なわれるのである。

こうして、研修費の贈呈が終わると乾杯が行なわれる。乾杯後、舞子、芸子、芸妓たちは舞台を降り、会場内のそれぞれのテーブルを立ち寄って、参加者たちに挨拶をしてまわる（写真4）。

一方で、参加者たちのなかには、芸妓たちが訪れるまでのあいだ、会食を楽しむ者や

² 冬の会は、「四川楼」、「千歳館」、「亀松閣」、「嘯月」「のゝ村」、「揚妻」のうち、いずれかの料亭で行なわれる。

³ 夏の会は、「ホテルメトロポリタン山形」、「パレスグランデール」、「ホテルキャッスル」、「山形グランドホテル」のうち、いずれかの会場で行なわれる。

知り合い同士で懇談する者もいるが、その多くは隣席の参加者たちと名刺交換を始める。

この発表会の参加者たちのほとんどは、一部を除き、「紅の会」の協賛企業である山形市内有力企業 32 社の関係者、支援団体である山形商工会議所、山形市観光協会、山形県観光物産協会の関係者、そして「育てる会」に所属する会員たちという、いわゆる地域の「旦那衆」で構成されている。

つまり、この発表会は、芸妓から舞子、芸子へと継承される伝統芸能を鑑賞する会であるとともに、山形市の花柳界の発展のため、舞子の育成を支援する「旦那衆」が集う会でもある。



写真 4 会場の様子



写真 5 参加者を見送る「やまがた舞子」たち

この会に参加する「旦那」は、この発表会を通して「舞子」を育てることで、他の「旦那」である地元の企業との顔合わせを行ない、経済界での結びつきをより密接なものとしている。このことからこの発表会という場は、これまでの花柳界が担ってきた「政財界の奥座敷」の新たなあり方の一つといえるだろう。

宴もたけなわになった頃、司会の紹介のもと、今年新たにお披露目を果たした新人の舞子たちの挨拶が行なわれたのち、お開きの式辞が行なわれる。式辞の最後には、「山形らしく、花笠締めでお開きといたしましょう」との挨拶があり、一同手を広げ、「ヤッシュウマカシヨウ、シャンシャンシャン」の掛け声とともに手拍子を打つ。こうして第 35 回「やまがた舞子伝承の夕べ」は閉会となった（写真 5）。

山形市の花柳界では、花柳界の再活性化を図るため、「紅の会」を設立し、社員芸妓として「やまがた舞子」を新たに設けた。こうした取り組みのもと、山形の花柳界では、現在に至るまで 32 名の舞子が誕生し、現在は 7～10 期生の舞子らが活躍している。

今回、「やまがた舞子伝承の夕べ」の参与観察を行なうことで、支援団体による「舞子」の育成の実態、そして山形の花柳界を支える現在の「旦那衆」の姿や、現在の花柳界での「政財界の奥座敷」のあり方というものが明らかとなった。